

英語外部検定利用入試 主要 10 大学 志願状況調査

立教大、法政大で大幅増！志願倍率 100 倍超えも

旺文社 教育情報センター 29 年 3 月 30 日

本年度の入試も終わりを迎え、各大学の入試の結果が出揃いつつある。今年度の入試を語る上で外すことのできない英語外部検定利用入試（＝外検入試）。今回は外検入試を実施した私立 10 大学の志願状況について調査した。

今回、調査対象とした大学は、今年度の一般入試で外検入試を実施している青山学院大、学習院大、上智大、中央大、東洋大、法政大、明治大、明治学院大、立教大、早稲田大の 10 大学。外検入試とひとことでいってもその内容は大学によってさまざまだ。「出願資格」「得点換算」「加点」といった利用方法に加えて、「全学部日程」「個別日程」などの入試方式や、他の入試方式の併願の可否についても注目したところ、受験生にとってのメリットに差が見えてきた。多くの志願者を集めた入試方式にはどんな理由があったのか、その要素についてここで推察してみよう。

●志願者が爆発的に増加した立教大

今年度で 2 回目の外検入試となった立教大は「全学部日程・グローバル方式」の名称で外検入試を実施している。この方式では外検資格を持つ志願者は英語以外の 2 教科で受験することができる。立教大の全学部日程入試は「3 教科方式」と「グローバル方式」に分かれるが、両方式の併願はできず、さらに全学部日程ではあるが、他学部の併願もできない。後で見ると、他大学では他方式や他学部と学内併願ができる外検入試が拡大している中、立教大のこの方式にはこうした「特典」がなく、純粋に外部検定を利用してチャレンジしたい受験生を集める方式となっている。

また外部検定の利用方法では、他大学は外検資格を「加点」や「得点換算」で優遇するケースもある中、立教大は「出願資格」として利用。優遇という点でいうと、受験生へのメリットは小さい。

以上の点を考慮すると、立教大の外検入試は受験生にとって厳しいといえる方式であるにもかかわらず、今年度「グローバル方式」の志願者数は昨年比 1,000 名増（374 名→1,377 名）、「3 教科方式」でも 500 名増（6,900 名→7,490 名）となった。一見、強気とも思われる入試方式でこれだけ志願者を増やしているのは立教大の人気の高さの表れなのだろう。

●昨年度の志願者数から微減の上智大

今年で 3 回目の外検入試を実施した上智大は「TEAP 利用型」の名称で TEAP の得点を「出

願資格」として利用する。今年度の志願者数は昨年と比べ全体では微減（4,634名→4,460名）となっている。

今年の上智大の志願者数を見る上で欠かせないのが、利用する TEAP スコアの「4 技能化」だ。外検入試を導入した一昨年は全学科で 2 技能（Reading・Listening）だったのが、前年度に一部の学科で 4 技能化（Reading・Listening・Writing・Speaking）、今年度に残りのすべての学科で 4 技能化に踏み切った。

学科ごとの志願者数を比較すると、前年度すでに 4 技能化していた学科では今年度は志願者数が増加、対して今年度 4 技能化を行った学科は主にその数を減らし、その結果、大学全体では微減となっている。しかしながら出願資格のハードルを上げることで、一層高い英語力を受験生に求めるようにしたにもかかわらず、志願者数が微減に留まったことは、肯定的にとらえるべきだろう。

TEAP 利用型は全学部日程で実施されるので、上智大の中で志望する学部が複数ある受験生にとっては 1 度の受験で複数学部に出願できることが魅力だ。この点からも上智大を第一志望とする受験生には、この TEAP 利用型は見逃すことのできない入試方式となっている。

●志願者倍増の法政大、人間環境学部では 111.8 倍の高倍率

法政大でも今年の外検入試は志願者が倍増した（430名→969名）。大学全体で募集定員 38 名、平均志願倍率 25.5 倍の狭き門となった。特に人間環境学部では定員 5 名のところ 559 名が志願、111.8 倍の高倍率を記録した。

法政大は「英語外部試験利用入試」の名称で「出願資格」として外検入試を実施、英語を除く 1 科目で受験できる点が特徴だ。受験する 1 科目が共通であれば他学部の併願も可、しかも全学部日程の「T 方式」とも併願が可能のため多様な併願プランを組むことができる。受験生にとっては 1 度の受験で複数学部、複数回判定してもらうことができるため、安心感の強い入試方式といえるだろう。

●外検入試に多くの募集枠を割く早稲田大、併願しやすさが人気

今年から外検入試を導入した早稲田大、文化構想学部で 70 名、文学部に 50 名と他大学と比べ、大きな募集定員枠を取っているのが特徴だ。

早稲田大も外検入試（英語 4 技能テスト利用型）と従来型の一般入試の併願が可能で、両方で多くの志願者を集める結果となった。早稲田大は外部検定を「出願資格」に利用するが、その総合点だけでなく 4 技能それぞれのスコアにも最低ラインを設定している。この点で他大学の外検入試よりも一段階高いハードルを設定しながら、多くの志願者を集めるのは早稲田大の人气があつてこそということができる。

●手厚い優遇の明治大、しかしながら志願者数は伸びず

明治大も今年から外検入試（英語 4 技能試験活用方式）を導入した大学のひとつだ。利用方法は「出願資格」に加え、それ以上の英語レベルの受験生に段階的に「加点」する方式だ。

「出願資格」の外部検定利用では、大学が設定する英語レベルを満たした受験生は全員同

等に扱われ、差がつくことはない。たとえ英語がずば抜けて得意な受験生であっても、ギリギリで出願資格を満たす英語力の受験生との間に差がつかないため、英語が得意な受験生であっても有利になるわけではない。

明治大の「出願資格+加点」では一定の英語レベルを「出願資格」として受験生全員に課しつつ、それ以上の英語力を持つ優秀な生徒には「加点」という優遇を行う方式。これは、英語が得意な受験生にとって非常に利用価値の高い入試方式と思われたが、今年は募集定員40名のところ志願者174名と、思いのほか伸びなかった。これは外検入試の「英語4技能試験活用方式」が「3科目方式」と併願ができないため受験生が敬遠したとも考えられる。

●一般入試（前期）すべての入試方式で外検資格を優遇する東洋大

東洋大では今年度から前期日程において、経営学部を除くすべての学部で外検資格の優遇をはじめた。その内容は、すべての入試方式で外検資格を「得点換算」するものだ。その換算も70～100点と幅広くかつ細かく設定している。

東洋大の特徴は、外検入試として独立した入試方式は設定せず、一般入試の中で外検資格を優遇している点。他の大学では外検入試の募集定員に限られる中、東洋大ではさまざまな受験方式と大きな募集定員枠で外検資格を利用することができるので、受験生にとってのメリットも大きい。

大学の発表では、今回の入試で外検資格を利用した志願者の数は、全体の35,893名のうち2,670名(7.4%)。想定していたより多くの志願者が利用したと感想をあらわした。そのうち利用された外部検定は英検が70.9%、続いてTEAPが25.6%。この2つで利用された外部検定のほとんどを占める結果となった。

前期日程の志願者数全体では、前年度比122.4%と大きくその数を伸ばす結果となった。東洋大では今年度から学部新設や入学定員増が実施されたため、それらも志願者増の大きな要因と思われるが、外検入試の導入も志願者増の一因となったと考えられる。

●多くの併願パターンを選択できる「他方式併願」と「他学部併願」

ここで各大学の外検入試について、入試方式と併願の可否を以下の表にまとめた。

	一度の受験で		外検利用法	志願者数概況	受験科目
	他方式併願	他学部(科)併願			
法政大	○	○	出願資格	【外検2年目】 昨対…倍増 430名→969名	1科目
明治学院大	○	○	出願資格	【初外検】 852名、30.4倍	2科目
東洋大	○	○	得点換算 (一部出願資格)	【初外検】 昨対→増加 28,440名→34,812名(一般入試前期 志願者数)	2～4科目
早稲田大	○	×	出願資格	【初外検】 911名、7.6倍	2科目
中央大	○	×	出願資格	【初外検】 615名、20.5倍	2科目
学習院大	○	×	出願資格 +得点換算	【初外検】 578名、28.9倍	2科目
上智大	×	○	出願資格	【外検3年目】 昨対…微減 4,634名→4,460名	2科目
立教大	×	×	出願資格	【外検2年目】 昨対…激増 374名→1,397名	2科目
明治大	×	×	出願資格+加点	【初外検】 174名、4.4倍	2科目
青山学院大	×	×	出願資格 (一部得点換算)	【一部初外検】 1,281名、9.4倍 ※外検2年目の学部は全て志願者増	2科目

「他方式併願」とは「外検入試」と「その他の入試方式」で同一の試験問題が使用され、両方式の併願が可能かどうかを表している。例えばある受験生が「外検入試」に出願し「国・地歴」の受験が課されていたとする。この受験生が「英語」を加えた「英・国・地歴」を受験することで「3教科型」にも出願でき、「外検入試」と「3教科型」それぞれの方式で合否判定してもらえるとというもの。

「他学部（科）併願」とは同一の入試問題で大学内すべて（または一部）の学部、学科も併願できる入試方式。最大の特徴は上智大の紹介で前述したとおり、1度の受験で他学部も併願ができ、複数回合否判定が受けられる点。同一大学内で複数の志望学部がある場合には有効な受験方法となる。

表中では学内併願の選択肢が多い大学を上に掲載している。最も学内併願の幅が広いのは法政大、明治学院大、東洋大。他方式、他学部との併願が可能のため、多彩な併願プランを立てることができる。対してもっとも併願の幅が狭い立教大、明治大、青山学院大では1度の受験で1回の合否判定しか受けることができない。

外検入試の最大のメリットは、事前に「英語科目」の得点を事前に確保できることや、「出願資格」をクリアすることで入試当日に英語の試験が課されなくなることだ。表中に記載したように入試当日に受験する試験科目が1～2科目のみとなる入試方式が多く、受験生の負担という点から見ても人気を集める入試方式となり得るだろう。

●受験生にとって大きなメリットの「複数回判定」

ここまで各大学の志願状況と併願の可否を見てきた。同じ「外検入試」として扱われている各大学の入試方式にも併願をまったく設定しない大学もあれば、さまざまな併願方法を設定する大学もあり、大きな違いがあることがわかった。受験生に現役志向が高まる中、併願の可否は出願大学を検討する際、大きな決め手のひとつなるといえるだろう。2～3月の入試の過密スケジュールの中、1度の受験で他方式や他学部を併願でき、複数回合否判定してもらえることは受験生にとって大きな魅力だ。

今回調査した外検入試においても、併願しやすい設定を行う大学で多くの志願者を集める傾向にあることが見て取れた。ただ、全学部日程での実施でありながら他方式、他学部の併願ができない立教大が非常に多くの志願者を集めている点には、今後も注目していかなくてはならない。

●これから外検入試が広がっていくためカギを握る「募集定員枠」と「受験の公平性」

外検入試が実施されはじめてから3年目の今年、一般入試で外検入試を実施する大学は昨年度から倍増して110大学となった。これからも当面、増加していくのは間違いない。

多くの入試方式の中でも一定の地位を確立しつつある外検入試だが、今後の課題のひとつには、募集定員枠の大きさがあげられる。各大学が設定する募集定員を見てみると、その人数はまだ少ない。今は各大学が外検入試でどのくらいの志願者が集まるか、様子を見ている段階と思われる。今後外検入試がさらに広がっていくには、どの程度の募集定員が外検入試に割り振られるかが大きな要因のひとつとなるだろう。

ただし各大学が外検入試の募集定員を拡大していくにあたり、その前提として外部検定そのものの受験環境の公平性が担保されていなければならない。特に受験地、経済的理由から受験生に不利益がおきないように、国をはじめ各試験団体の一層の配慮を期待したい。